

新成人のみなさんへ～20歳になったら国民年金～

国民年金は、年をとったとき、病気やケガで障害が残ったとき、家族の働き手が亡くなったときに、働いている世代みんなで支えようという考えで作られた仕組みです。20歳以上60歳未満の方は加入することが義務付けられており、20歳になると日本年金機構から国民年金加入のお知らせが届きます。

■ 国民年金のポイント

○ 将来の大きな支えになります

国民年金は、20歳から60歳までの方が加入し、保険料を納める制度です。

国が責任をもって運営するため、安定しており、年金の給付は生涯にわたって保障されます。

○ 老後のためだけのものではありません

国民年金は、年をとったときの老齢年金のほか、障害年金や遺族年金もあります。

障害年金は、病気やケガで障害が残ったときに受け取れます。また、遺族年金は加入者が死亡した場合、その加入者により生計を維持されていた遺族（「子のある配偶者」や「子」）が受け取れます。

国民年金のご相談・お手続きについては、右上のお問い合わせよりお電話ください。

国保病院のお医者さん

「^{しんしゅう}侵襲」に思ふ

記：内科医 奈良原 裕

新年あけましておめでとうございます。昨年引き続き新年号に寄稿させていただきます

今回は、病院でときどき耳にする「^{しんしゅう}侵襲」という言葉に思いを巡らせてみたいと思います。

「侵襲」とは、簡単に言えば「身体への危害」と訳せます。病院で行われる検査や治療には、大小様々な侵襲が含まれています。例えば、採血。血液を取るためには細いながらも血管に針を刺すという侵襲が現代の医療においても必要です。レントゲン検査も微量ながら放射線を浴びますが、体に影響を及ぼすレベルではないので限りなく小さい侵襲と言えます。

一方で、手術は大きな侵襲と言えます。特に、心臓血管外科手術は全身麻酔をかけて胸を切り開いて、さらに心臓を止めることもあるので、医療行為の中では一番大きな侵襲を患者さんに与えていることとなります。もちろん、侵襲以上の利点が患者さんにあるからこそ、こんなに大きな侵襲が許されているわけです。医療行為には大小さまざまな侵襲が伴ってしまいますが、近年は、飲み込むだけでよいカブ

セル内視鏡が開発されたり、ロボットを用いて体に小さな穴を開けるだけで手術が可能になったりと医療行為の「低侵襲化」は日進月歩です。

こうなると、少し前までは体の弱った高齢者などには不適とされた検査や治療が、低侵襲化が図られることでどんどん可能となっており、そして、これはさらなる寿命の延伸にもつながっています。

さて、人の寿命はいったいどのようにして決まる（決める）のでしょうか。生物学的な寿命、人生観的な寿命、その両側面から考えるなど、寿命の捉え方はもちろん人それぞれですが、医療行為の低侵襲化はメリットもある反面、悩みや迷いも増やしているのかもしれない。

国保病院に非常勤医として赴任して2年が経とうとしています。木古内町をはじめ道南地区の皆様が、明るく楽しい日々を過ごせるように、体のこと医療のことを病院でたくさんお話していけたらと思っています。

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。